Mansfield Park の登場人物たち

野　村　ヒ　サ

'I recognize that its heroine is a little prig, and its hero a pompous ass, but I do not care.' と言ってサマセット・モームは *"Mansfield Park"* をジェィシ・オーステンの6篇の小説のうちの一番のお気に入りとした。

この作品はオーステンの6篇の小説のうちで最も長いのだが，少し変った特徴を持っている。marginal figuresがほとんど皆無であること，そしてanti-heroineがあまりにも美しく感じの良い女性に描かれすぎていることは定説になっている。また前に書かれたどの作品よりも持参金とか年収とかいった形で現実的な生活の条件が強調されている。この作品の中での例をいくつか挙げてみると，

Miss Maria Ward, of Huntingdon, with only seven thousand pounds, had the good luck to captivate Sir Thomas Bertram, of Mansfield Park… (M.P.3)

Mr. and Mrs. Norris began their career of conjugal felicity with very little less than a thousand a year. (M.P.3)

Enquire where she would, she could not find out that Mrs. Grant had ever had more than five thousand pounds. (M.P.31)

…nor could he (Edmund) refrain form often saying to himself, in Mr. Rushworth's company—— "If this man had not twelve thousand a year, he would be a very stupid fellow." (M.P.40)

この現実的な描き方はオーステンが37才という年になってから書き始められたことにもよると思われるが，この後に書かれた作品 *Persuasion* はかなり異ったロマンティックな傾向であることを考え合わせると興味深いものがある。*Mansfield Park* の執筆中に匿名で出版された *Sense and Sensibility* の初版は，140ポンド，翌1812年に推敲のすえ *Pride and Prejudice* と改題されて世に出た第二作の原稿は，たった110ポンドの収入をオーステンにもたらしたに過ぎなかった。同時代のウォルター・スコットが全英的な人気を博し，1作ごとに何千ポンドという巨額の収入を得て，派手な生活を営んでいたのとは，まったく反対である。オーステンは晩年に自分の小説からの利益は600ポンドを超えると書いているが，これは本当につつましいもので，婚期を逸した田舎の老嬢の小遣いかせぎの域を出ない。この点を考え合わせてみると，万事小ぢんまりと几張面な人柄のオーステンが，自分のはじめて手にした原稿料からの類推で，当時執筆中だった *Mansfield Park* に現実的な金額を記したくなったと考えてもよかろう。

この作品のヒロインであるファニー・プライスはその10才の時，マンスフィールドパークにもらわれて来た時の様子から，たんねんに描かれている。オーステンのそれ以前に書いた小説のヒロインたちはみな健やかで意気盛んであったのだが，ファニーは反対で，小心でひかえめで，正義感に富んではいるが，いくぶん気むずかしいところがある。オーステン賛美者たちの立場から見れば，誰でも結婚したくなるようなヒロインを創造して読者を喜ばせることがオーステンの務めなのだから，そうしなかったことは，オーステン個人

の何らかの種類の危機（福音主義への改宗，結婚拒否，中年への接近等原因はいろいろ考えられるが）を反映しているとも受取れる。しかしこの作品によるオーステンの試みは，理性的で計画的ではないにしても危機とは言えないようである。1813年1月29日の手紙の中でオーステンは

…Now I will try and write something else, and it shall be a complete change of subject——ordination.

と書いている。つまりオーステンはこの作品の創造において，意識的に実験的な方法をとったのである。オーステンは，しばらく沈黙していたあとであることもあって，*Pride and Prejudice* のような 'rather too light and bright and sparkling' な小説をもう一つ書きたいとは思わなかったのだ。*Mansfield Park* はオーステンの円熟時代に属する最初の小説であり，上に述べた実験的な方法はもちろん，その構成の密度も，末梢的な事件の秀でた複雑性も，その抱負を明らかに物語っている。

ファニー・プライスの義理の伯父サー・トーマスは体制擁護の権化のような人物で，その2人の娘たちとファニーのtheatrical（素人芝居）への出演にはもちろん反対であるということはわかりきっている。（だからこの目論（もくろ）みは，サー・トーマスの留守中に進行するのである。）若い婦人たちは自分たちに人々の注意をむけさせることで慎しみ深さにもとる行いをしてはならないというのがその理由である。サー・トーマスの次男エドマンド（ヒーロー）は，女性たちの出演などまったく見込みがないと考えているので，男性たちが（女性の代りに）協力すればよいと言うだけである。口喧嘩しながらも素人芝居の準備が進行していくと，エドマンドは女性たちの誇示癖が不当だと非難しはじめる。彼女たちの台詞，役割，演技力，危険な馴れ馴れしさが反対理由である。

My father wished us, as school-boys, to speak well, but he would never wish his grown up daughters to be acting plays. His sense of decorum is strict. (M.P.127)

ファニーは庭で籠いっぱいの花を摘めば必らず疲れて頭痛がする。18世紀から19世紀への転換期によく読まれたconduct books（処世訓）にも明らかであるが，ファニーの極度の身体の弱さは伝統的な女性の特質なのである。

ここで当時の女性像について少し考察してみたい。当時の英国男性たちは，もし女性たちが教育を受け理性的な人間として行動することを許されたら，彼女たちは早速自由な行為者としての資格があることを知り，自分自身の望みを持ち，自分の幸福を追求するようになってしまい，素直な娘，従順な妻としてだけでは満足しなくなるだろうと考えていた。Hannah More（1745～1833）の *Coelebs in Search of a Wife* にはオーステンも注目しているが，この本によると女性の美徳の唯一の切実な要求は 'positive duty of being agreeable at home' であった。この本の anti-heroine のアメリア・ラトルは，その大胆さ（今日の我我の眼から見れば，ごく当り前のことなのだが）のために顰蹙（ひんしゅく）を買う。その大胆さの内容は

1)自分の意見をはっきり言った。
2)男性の助けなしに馬車に乗った。
3)「(馬車を) 出してちょうだい」と（他人に頼まず）自分で言った。

全くあきれるような理由であるが，当時はvitality, confidence, self-sufficiencyは女性にとって結婚むきのqualitiesではなかったのだ。アメリアの決定的欠点は男性の判断にまったく無頓着なことであった。これに反してheroineのLucilla Stanleyは

1)話しかけられなければ自分からはしゃべらない。
2)そういう時も父兄と同席である。
3)料理が上手である。
4)メニューのプランニングとハウスキーピングがうまい。
5)両親の誇りであり，村の貧民たちにとっては天からの賜物である。
6)敬虔なキリスト教信者である。
7)談話中の男性たちの賢明さが解るほど充分な教育を受けているのに，談話に仲間入りしたり反論したりは決してしない。
8)女性の教養は自分が向上し，家族をより美しくし，夫を楽しませ，子供を教育するためにだけ身につけられるべきものだと信じている。

要するにLucillaは「完璧な妻」だったわけである。しかし別の見方をすれば，女性のこういう美徳は男性の注目を引くためにだけ存在することになる。夫を捕えることだけが女性の美徳の唯一の動機と言えるのであるから。

当時の懐疑的な女流作家たちは，自分の作品に気紛れな女権拡張論者とか女流哲学者とかを登場させ，痛烈な社会批評を行わせたりした。こういう人物たちは，1790年代の女権拡張論の原理を滑稽に誇張した形で支持し，その結果その小説全篇にわたってあざ笑われつづけ，またLucillaのような慎しみ深く分別のある若い女性たちと比較対照されたりした。しかしこの種の人物たちの登場は1815年を境にして無くなったといわれている。オーステンは滑稽な女性哲学者を創造しなかったことで，同時代の小説家たちの中で例外的なのである。しかし他の作家たちと同様に女性の慎しみ深さについての表現を常套手段に託している。*Mansfield Park*の中でオーステンは伝統的な方法を分析していると思われるが，それらの強制がオーステンの小説に表面化している。例えば，オーステン小説のヒロインたちは，結婚申込みの場面で承諾の返事をする時の様子を描かれていないのは有名なことなのであるが，その原因はオーステンが激しい感情に直面出来ないという奇妙な性質を持っていたためだという人さえいる。

*Adeline Mowbray*の中でOpieは「結婚は"beneficial to society"と結論している。その理由は結婚が子供を守り，節操を主張し，愛情を喚起し，実行する傾向があり，激情をコントロールするからであるという。この作家の，両極端の人物たちを張り合わせるというやり方は，オーステンが*Mansfield Park*で，美人ではあるが，ちょっと淫らなところがあるメアリー・クロフォードを，非常に礼儀正しく，真面目なファニー・プライスと張り合わせている方法とよく似ている。この両極性は，Conservative Novelの特徴の一つである。*Mansfield Park*にはもう一つの両極性がある。ヘンリーとマライアの不義にはファニーとエドマンドとの法にかなった結婚が対照させてある。

ヒロインのファニー・プライスが虚弱であることはすでに述べたが，これは当時の良家の娘たちにはむしろ望ましい属性であった。

サー・トーマスとファニーによって大切に守られている世間の秩序は，女性のたしなみの規範と密接に関わっている。*Pride and Prejudice*と同様に*Mansfield Park*は英国の威厳ある上流階級の人々についての保守的な神話的解釈の要因を吟味しているといわれている。*Pride and Prejudice*においてオーステンは神話的解釈に肯定的であり，さらにそれを最良の状態にまで変化させているが，*Mansfield Park*においてはオーステンはその虚しさばかりでなくその道徳的主張の不健全性をも暴露している。共通の不健全状態がマンスフィールド・パーク全体に充満している。そして問題は，クロフォード兄妹のような有害な新来者ではなく，パークそのものの中に在るのだ。バー

トラム家は決して理想郷ではない。長男トムの放蕩のために，次男エドマンドのものと予定されていた聖職録を売らなければならないほどその経済の底は浅い。その上，金づるであったアンティーガ島の領地の経営不振（これを奴隷制度の破綻のためであると指摘する批評家もいる。）によって，なおさらバートラム家の財政は危うくなり，サー・トーマスは戦時の航海という危険を冒してまで，その立て直しのためにアンティーガの領地へ赴くことになる。マンスフィールド・パークは理想境ではなく，今にも崩れそうな世の中そのものなのである。この小説の最後をしめくくっている，

as thoroughly perfect in her eyes, as everything else within the view and patronage of Mansfield Park had long been.

という一節は，あくまでも現実にてらして読めば，作者の皮肉と解釈出来るのである。家族のどの人物も欠点だらけで，この屋台骨の傾いた屋敷は見かけとは大ちがいで，ファニーにやっと支えられていると言ってもよい。維持していくには大そう骨の折れる世界なのである。

オーステンはファニーへのインパクトを印象づけることによって，上流階級についての批評を行なっている。ファニーは女性の美徳と子としての親への感謝の念においては典型的なのだが，彼女は自分が貞節に抱いて来たその同じ道徳的気質に裏切られるのである。もしこの小説に異常なものがあるとすれば，それはファニーを威圧し，誤り導く人物たち（サー・トーマスとノリス夫人）とその人物たちによって強い影響を受けるファニーの観点の探求であると言えるであろう。ファニーのこの気の毒な一体感のおかげで，この作品はオーステンの小説のうちで最も皮肉な作品となり，また保守的な小説の辛辣なパロディーとなっている。

この作品は1811年まで手をつけられなかったのであるが，1790年代のものの考え方が随所に見受けられる。サー・トーマスはその従男爵としての地位にふさわしい役割を節操ある端正さで演じている。義妹の家の口(くち)べらしのために子供を一人（ファニー）引取ってやろうという時にも，聖職録の必要性についてもったいぶって論じる時にも，彼は常に自分の威厳を気にしている。自分の娘たちについて考える時にも，

…His daughters he felt, while they retained the name of Bertram, must be giving it new grace, and in quitting it he trusted would extend its respectable alliances. (M.P.20)

と考えている。もちろんこういう考え方は，当時の良家の父親たちの当然の希望であった。しかし同時にオーステンは，サー・トーマスのもったいぶった無頓着さでその廉潔さを傷つけてもいるのである。ファニーは（慈悲深くも）マンスフィールドに取取られるが，それは彼女が「バートラム家の娘ではない」（つまり居候だ）ということをいつも忘れないようにさせておくべきだというサー・トーマスの特別の条件にもとずいてのことなのである。(M.P.10)

Mansfield Park におけるオーステンのもくろみは保守主義的神話をうまくいかなくさせることではなかったろうか。このための努力と考えられるものは，こまごまとした皮肉な事件が，あまり目立ち過ぎないようにではあるが，かなり豊富に起こること，またこの小説の中心的な設定，つまりバートラム家の家族たちの性格描写とに表われている。サー・トーマスの arched brow からもったいぶった言葉づかいに至るまで，あらゆるものが，名目上の統領としてのサー・トーマスを最高に際立たせている。この畏怖の念を起させる父親が子供たちに及ぼす支配権は，彼の子供たちを威圧し，違反しないように畏縮させる能

力とよく釣合っている。アンティーガからの（思ったより早い）サー・トーマスの帰国の際の，子供たちの驚愕の有様は印象的である。気の弱いファニーは以前からくせになっていた伯父の怖さがよみがえって来て，ほとんど気絶しそうになる。しかし彼女より図々しいバートラム家の子供たちも，慄えと恐しい想いとをファニーと分かちあう。(M.P.176) 一同が「絶対的恐怖」にとらわれ，サー・トーマスの足音に耳を傾ける時，恐ろしい沈黙が続く。しかし，この小説全篇でしばしば引合いに出される父親の権威はここでもまたぜんぜん役にたっていない。サー・トーマスの重重しさは子供たちの行動に精神面での抑制としてではなく，ごく表面的な抑制としてしか働かない。サー・トーマスは一同をしんとさせることは出来ても，無法状態を抑えることは出来ない。子供たちは間違った行ないをしたことよりむしろその発覚に怖れるのである。彼らは広大な屋敷の中でひそかに事を運ぶのが巧みである。結局サー・トーマスについて読者がわかる唯一のことは，彼が自分の娘たちの気立てについてまったく何もわかっていないということである。

Sir Thomas did not know what was wanting, because, though a truly anxious father, he was not outwardly affectionate, and the reserve of his manner repressed all the flow of their spirit before him. (M.P.19)

そういうわけで，サー・トーマスが自分の父親としての威厳で確保したと信じている子供たちの節操の固さは，彼の思いちがいなのである。

また威厳を保つために，当然知っていなければならないことがらに対して無知であったりすることにもなる。

オーステンの懐疑主義はまた美しいもの女性的なものへと拡がっていく。ファニーはマンスフィールドへ着くとすぐ，その夜のうちに伯母バートラム令夫人のやさしさに気づく。

…by the mere aid of a good humoured smile, became immediately the less awful character of the two. (M.P.12)

Edmund Burke 的な表現をすれば，

littleness and weakness are the very essense of beauty in women

なのである。しかしオーステンは辛辣にも，バートラム令夫人の場合を，女性のやさしさは大事にされすぎると夢遊病的怠惰状態になると片付けてしまっている。また，家長制度下の父親たちを，彼らの実際の姿と彼らを理想化して見る無邪気な少女の眼にうつる彼らの姿との間の矛盾を描き出すことによって，オーステンは父親像の問題を提起している。

To the education of her daughters Lady Bertram paid not the smallest attention. She had not time for such cares. She was a woman who spent her days in sitting nicely dressed on a sofa. (M.P.19)

グラント夫人の言葉によるとバートラム令夫人は，夫がいなくては何もならない人 (cipher) で，何でも大事なことは夫に任せてしまっている。(M.P.20, 162) サー・トーマス自身も自分の留守中自分の代りの役をしてくれるとは思っていない。(M.P.32) そういうわけで，バートラム令夫人のなすべきことは，気忙しく張切って何にでも口を出す職務担当者たるノリス夫人に任されることになる。またバートラム令夫人は子供たちのしていることに気がつかない人なので，素人芝居上演計画は彼女の鼻っ先で進行するのである。アンティーガの領地へ出かけた夫の旅の安全を気遣うどころか，彼女は夫の身が危険にさらされていることに気が付きさえしない。いろいろ細かなことを気に病むこともなく，

…sinks back in one corner of the sofa, the picture of health, wealth, ease, and tranquility, …falling ever so often into

a gentle doze. (M.P.126)

なのである。こんな状態ではMansfield Parkの両親の権威は不首尾に終ること疑いなしである。

この作品では道徳性についての親たちの信念ばかりか，悲しいことに家族全員が心得ちがいをしている。ファニーだけは例外であらゆる悪に対して受身である。サー・トーマスが怖いので叱られないように幼い頭で考えられる限りの気を遣い，それが習い性となった結果がファニーの美徳なのである。(少し行き過ぎた言い方かも知れないが)。

先ず長男のトム，無分別な浪費のためにバートラム家全体を借金に追込んでしまう。サー・トーマスは心をこめて（しかし威厳を失わずに）トムを諫めるが，まったく無駄である。

> I blush for you, Tom', said he, in his most dignified manner; 'I blush for the expedient which I am driven on, and I trust I may pity your feelings as a brother on the occasion. You have robbed Edmund for ten, twenty, thirty years, perhaps for life, of more than half the income which ought to be his.
> (M.P.23)

このような体制擁護の仮面と実体のくい違いのために *Mansfield Park* はパロディの要素が濃いと言えるのであろう。

素人芝居（Lover's Vows）の上演準備の大さわぎは，マンスフィールドの若い人々の無秩序な情熱よりも，いっそう読者の注目を引く。

彼らの不義の欲望という設定は，この小説の中で最も真実な行動例であろう。というのは，その間じゅうこの作品の主要な登場人物たちが活躍しつづけているからである。

バートラム令夫人の行動は無邪気な(知的)空虚さから出たもので，まったく悪意がない。

彼女には何も隠すものがない。例えば，長男トムの重病についてのファニー宛ての手紙（M.P.426）は信頼と希望と恐怖の混じりあった一種の恐がりごっこの作文である。しかしその他の人々の遊びには，ずっと多くの口実やごまかしが目立つ。ノリス夫人は献身的な妹，叔母の役割を演じている。マライアとジュリアはまじめな若い上流婦人たちの役を，そしてエドマンドはいつも用心深く気を配っている，高潔な牧師（候補）の役を演じ，トムでさえ自分に割当てられた役をしっかり演じている。女性が（素人芝居に）出演することは彼女たちの名声を汚すことになると，エドマンドが反論したのに立腹してトムは，「女連中の面倒を見るのは次男の出る幕ではないよ。サー・トーマスの娘たちが父の名を恥ずかしめるようなことを何もしないように，僕が面倒を見るよ。自分の頭の蠅を追えよ，エドマンド。そしたら僕が残り全員の面倒を見るから。」と主張する。(M.P.127)

サー・トーマスは，バートラム家の人々の中で，もっとも心遣いをする人物である。彼の見栄は人ばかりでなく自分自身をも満足させるためである。もちろんトムと同様にサー・トーマスは自分の家族の面倒を見ることに専心してはいる。まず女連中の面倒を見ることである。サー・トーマスは長女マライアが婚約者のラッシュワースを軽蔑していることを明らかに見てとるが，この間違いなく有利でうってつけの縁談（同じ州に住み利害関係も同じなので）に「気が進まなければ解消してもよい。」とは言うのだが，その言葉は口先だけである。

この縁談はいざ放棄するとなれば，苦痛を感じないわけにはいかないものなので，マライアが解消する気はないと伝えると，すぐ納得してしまう。ばつの悪さやあてこすりの非難を免れて，自分の体裁と信用が倍加しそうな縁組を確保することが出来て，自分の満足のあまり，サー・トーマスは娘の気持につい

ては，この目的に都合がよいように考える。

ファニーに対するサー・トーマスの親切は，もっとあてにならない。舞踏会のあとで（ヘンリーが同席しているところで）ファニーに寝室へ行くようにすすめるのだが，そのアドバイスは（ナレーターも暴露しているように）絶対的な力を持つものである。(M.P.281) もしその絶対権力がファニーのデリケートな健康を気遣って行使されたのなら許されるであろうが，ヘンリーの妻として推薦するためにファニーの聞きわけのよさを見せようとしていると誰にでも解釈出来る。姪の思いがけない有利な結婚をあと押ししてやろうと（実はファニーにとっては有難迷惑の気味もあるが），サー・トーマスは自分の屋敷でヘンリー・クローフォードのためのドラマを演出するのである。後になってファニー自身がサー・トーマスの余計な心遣いの仕末をつけるのがどんなに大変なことなのかわかる。自分の家族の（道徳的）福祉のためのサー・トーマスの行動は，息子のトムよりいくらか洗練されてはいるが，その廉潔さはトム同様見かけだおしであり，その尽力方法は高圧的である。

Mansfield Park においては，権力についての醜い事実が，親権者たちの説教にさらけ出され，あとでそれ自体の矛盾へと立ち返って来ることになる。この小説の主要な文学的手法の一つである。たとえば，サー・トーマスがヘンリーに推薦したいと思っているファニーの「ききわけの良さ」は実は計算した策動であって，異った意見を持つファニーには役に立たない。ノリス夫人も同様で，体面と利己心の間で浅はかにも自己矛盾に陥ってしまう。(M.P.345) ノリス夫人が素人芝居の台詞を読めと，いやがるファニーに強いる場面で

> I am not going to urge her…but I shall think her a very obstinate ungrateful girl, if she does not do what her aunt and cousins wish her.' (M.P.147)

という個所がある。そしてエドマンドでさえ

> 'Do Fanny, if it is not very disagreeable to you.' (M.P.171)

と自分の信条をごまかして懇願する。またサー・トーマスがファニーに，ヘンリーの結婚申込みを受入れるように強制し，それでもなおしりごみしている彼女に立腹して

> …self-willed, obstinate, selfish, and ungrateful (M.P.319)

と言い，また

> You cannot suppose me capable of trying to persuade you to marry against your inclinations. (M.P.330～331)

と主張する。3人とも一様に印象的には聞えても矛盾した説述によって，かろうじて保たれている体面にしがみついている。

当時の保守的な見解からは，女性の行儀作法という体制は女性達が反抗したいと思ったり自分に選択権がないのを不服に思ったりすることなしに，父親や親権者たちのもくろみに快く従うように，彼女たちをおとなしく従順に躾けることによって，あからさまな威圧の必要性をなくすことであった。オースティンの作品の多くにおいて，父親たちは専制的でもないし，娘たちは従順になるように躾けられてもいない。しかしマンスフィールド・パークの女性たちは確かに女の嗜(たしな)みという掟に拘束されている。女らしさという主題はこの作品に登場するすべての女性たちにとって一大関心事である。長女マライアの結婚をきめる時，まだ少し不安が残っていたが，サー・トーマスは娘の気性が妻（バートラム令夫人）のそれと同じように，あまり鋭くものを感じるたちでないと考えて，自分を慰める。しかしマライアにとっては，ラッシュワース氏との結婚は，新郎に仕えることではなくて，マンスフィールドからの独立と父親からの逃避を意味する。しかし慎しみ深さの教訓は肝腎(かんじん)なマライアとジュリアにではなく，ファニー

に意味を持つようになってしまう。極端な慎しみ深さにはそれ相応の犠牲も伴う。自己主張は見苦しいからするのはよそうと思い，ファニーは親権者たちが自分のためを思ってくれていると，それを頼りにするのだが，その結果は彼らが自分たちのことで手いっぱいであり，姪のことには気が廻る余裕がないことがわかる。自分がないがしろにされていることに気付いてもファニーは自分のことを誰かが考えてくれるなどと途方もないことを考える自分が悪かったのだという風に考えることしか出来ない。サー・トーマスとバートラム令夫人とエドマンドの３人がファニーにヘンリー・クローフォードとの気の進まない結婚を勧めるために共謀しているとわかったら，ファニーは自分の希望がどんなに軽んじられているかが解って驚くことだろう。しかし読者にとっては当り前のことである。ファニーはいつも自分の希望を優先されることなどなかったのだから。そうなると慎しみ深くしようというファニーの努力は，ただ慎しみ深く見えたというマライアの努力よりずっと挫折感や消耗性がはげしい。女の嗜(たしな)みの掟の驚くべき絆が二人の女性たちの間に暴露されている。

サー・トーマスの娘としてのマライアの社会的地位からは，彼女が少くとも一応は体裁のよい結婚を選択するという結果が想定できる。しかし何の財産もない姪のファニーには同様な斟酌(しんしゃく)は許されない。サー・トーマスが驚いたことにファニーがヘンリー・クローフォードの結婚申込みを受け入れる気がないことがわかった時サー・トーマスはその原因を当時の流行の有害な信条だと思って立腹し罵(ののし)る。

> I had thought you peculiarly free from wilfulness of temper, self-conceit, and every tendency to that independence of spirit, which prevails so much in modern days, even in young women, and which in young women are offensive and disgusting beyond all common offence. But you have now shown me that you can be wilful and perverse, that you can and will decide for yourself, without any consideration or deference for those who have surely some right to guide you——without even asking their advice.
> (M.P.318)

ここまで読み進んで来ると読者にもサー・トーマスのアドバイスは絶対命令なのだとよく解る。彼がファニーに期待するものは，喜んで指導を受ける心意気である。そうすれば，あからさまな権力の行使は必要なかろうから。ファニーの反抗は，彼の権威に挑戦する自己責任の想定の含みがある。だからサー・トーマスはぎょっとするのである。オースティンの小説に登場する他の country gentlemen とは異ってサー・トーマスは革命的な思想に敏感である。彼は気ままな気分とか自分で物事をきめること（当時大へん流行していた表現）がひどく嫌いで，その嫌悪感が彼の前革命的なお説教の中に厳然と存在している。

この作品の中では，女性の不謹慎に伴う最悪の罪（不義・密通）が次々と起る。しかしそういう効果は保守主義の作家たちが考えていたのとは反対の原因から生ずるのである。何の罪も犯さないたった１人の人物はファニーなのだが，彼女は自分ひとりで考え罪を犯さないでいるためには，社会的宗教的権威の統領に公然と反抗しなくてはならない。従順で温和なファニーが命令に従わはいからといって，それを手におえない情熱のせいにするのは，いかにもサー・トーマスらしい鈍感さである。

女性の選択というテーマから見ると，サー・トーマスのファニーとの面談とマライアとの面談とはまったく対照的である。マライアが愛してもいない男性との結婚を望むのを賞讃

すべきことだとするのと同様に，ファニーが愛してもいない人との結婚を断わるのを，若い人の熱っぽい空想，見境いのない気紛れのせいにしてしまう。いっぽうファニーの方は伯父（サー・トーマス）ほど洞察力があり名誉を重んじる善良な人には「前から嫌いだったんです。」とだけ言っておけばそれですむだろうと思っていたのだが，情ないことにそれではすまなかったのである。(M.P.318)

サー・トーマスは次男エドマンドが世襲財産を失なって落胆しているのを同情する段になると同情心に富んだ父親になれるのである。しかしファニーが後で思い出しているように，サー・トーマスには不似合いな相手と結婚しがちな若い娘の気持はわからない。

He who had married a daughter to Mr. Rushworth, Romantic delicacy was certainly not to be expected from him.' (M.P.331)

反対の側から考察すると，エドマンドがヘンリーに結婚申込みを成功させようと，ファニーを説得する場面がある。それはファニーが慎しみ深いからこそ出来ることである。

'You have proved yourself upright and disinterested, prove yourself grateful and tender-hearted ; and then you will be the perfect model of a woman, which I have always believed you born for.' (M.P.347)

皮肉なことにエドマンドはファニーが自分に片想いしていることにぜんぜん気がついていない。

'the perfect model of a woman' であるためには，いくつか果すべき責任がある。ファニーは保護者の監督とは関係なくロマンティックな恋愛感情を抱かなかったことと財産めあての結婚を望まなかったことで，すでにその責任のいく分かを果している。しかし，女性の手本になるためには，まだ他になすべきことがある。サー・トーマスがその結婚を認めたからには，（実はひとりで乗り気になっているのだが）ファニーはヘンリーが結婚を申込んでくれたことに感謝しなくてはならないし，愛情を示してくれた男の感情を損わないように心を砕かなければならない。要するに 'Yes' と言わなければいけないのである。しかし自分の良心に従えば，慎しみ深い女性に必要とされる義務とは相反する行動を取らなくてはならないことにファニーは疑問を感じてとまどう。

'How then was I to be——to be in love with him the moment he said he was with me? How was I to have an attachment at his service, as soon as it was asked for?' (M.P.353)

ファニーの疑問に答える適当な方法はこの作品には書かれていない。

外から見るとファニーの拒絶はコケティッシュな 'No' とも受取れるのである。ヘンリーは，そう感じたのか，ファニーがどんなに懇願しても結婚を諦めない。ファニーは困惑するが，その言い訳はヘンリーには率直でないように思える。

Fanny knew her own meaning, but was no judge of her own manner. Her manner was incurably gentle, and she was not aware how much it concealed the sternness of her purpose. Her diffidence, gratitude, and softness, made every expression of indifference seem almost an effort of self-denial ; seem at least, to be giving nearly as much pain to herself as to him. (M.P.327)

このように慎しみ深さがファニーの主張を逆に解釈させてしまうもどかしさがある。

女性の感謝に満ちた服従は非常に重要なものとして取扱われている。女性特有の慎しみ深さだけが保護者の権威の継続を保証すると考えられたからである。トム・バートラムだけは馬に夢中になっているので，メアリー・クローフォードがいくら誘惑しても無駄なの

であるが，そのトムを除けば，この作品に登場する男性たちは女性の性的魅力に敏感である。たとえばエドマンドはメアリーに交互に魅せられたり怖くなったりする。また気の毒なラッシュワース氏は母親といっしょにいる時だけほっとする。ヘンリー・クローフォードは密通の主犯なのだが，彼自身の告白によれば彼は，「女については用心深い性格」なのである。(M.P.43) 世話になっていた叔父（海軍提督）の不行跡のために兄妹はマンスフィールドへ来たのだが，そういう経歴があるので，彼がひょうきんに告白したところによる

'willing to risk (his) happiness in a hurry'

なのもうなずけるのである。ファニーが妻として実行することをヘンリーが期待している美徳を見ればヘンリーの危険の性質が理解出来る。

Henry Crawford had too much sense not to feel the worth of good principles in a wife, though he was too little accustomed to serious reflection to know them by their proper name ; but when he talked of her having such a steadiness and regularity of conduct, such a high notion of honour, and such an observance of decorum as might warrant any man in the fullest dependence on her faith and integrity, he expressed what was inspired by the knowledge of her being well principled and religious. (M.P.294)

ヘンリーがファニーに頼れると期待している節操，名誉，上品さ，信仰，誠実は，彼女なら不義の誘惑に負けないだろうという確信を表わしている。ファニーこそ，人並みすぐれた慎しみ深さと誠実さで，クローフォード提督にもこの世に存在し得ないと思わせるような人物なのである。

anti-heroine のメアリー・クローフォードは配役について，ひどく大胆な質問をする。

'What gentleman among you am I to have the pleasure of making love to?

(M.P.143)

この質問には無秩序と性的魅惑とが感じられる。エドマンドがはじめから敏感に反応する。オーステンの作品のうちではこの小説が，男女の間の微妙な感情の交流を最も広く取扱っていると思われる。細かな記述が性的魅力に対するエドマンドの動かされ易さ（敏感さ）を物語っている。彼はメアリーの初めての乗馬を賛成し励ましさえする。「純粋な運動の喜び」（これはエドマンドの善意な解釈）はエドマンドにとっては魅力がある。彼女のそばに付添って手綱の扱い方を教えたりすることも楽しみである。(M.P.67) 遠くからそれを眺めているファニーが心中穏かでないことは容易に想像出来よう。たしかにメアリーには活発な魅力があるのだが，仮にエドマンドが彼女のはにかみのない活力を受け入れることが出来たとしても，彼はメアリーのぞんざいな（時には淫らな）言葉遣いを我慢することは出来まい。ファニーが，伯父サー・トーマスの畏敬の念を忘れず，伯父をないがしろにしないように (M.P.436) 生活しているのとは反対に，メアリー・クローフォードは伯父クローフォード提督を軽んじ，ぬけぬけと悪口を言う。またファニーがエドマンドを敬愛しているのとは対照的にメアリーは彼を尊敬してはいない。そしてエドマンドが重んじている礼儀には全く考慮しないで話をする。メアリーの無遠慮な言葉遣いに当惑して，エドマンドは，かつては自分の生徒であったファニーにメアリーの話の内容についての感想をたずねる。(P.M.63) ファニーは女性の慎しみ深さについてはエドマンドより厳しい判断を下す。エドマンドはメアリーの意見を咎めはしないが意見を公表することは不作法だという意見である。エドマンドにとってメアリーの欠点は表面的なものにすぎない。クロ

ーフォード提督の下品さはファニーには軽い意味しかもっていない。ファニーが，間違っていると考えるのは伯父についての批評の表現法ではなく，そういう心の持ち方自体なのである。そしてその不作法そのものがクローフォード提督夫人（メアリーの叔母）にはね返ってくると考える。(姪のメアリーをすっかり自分で育てた叔母が提督に当然敬意を払わねばならないという正しい考え方をメアリーに教えておかなかった。) つまり姪の欠点は叔母の欠点だという意見である。

マンスフィールド・パークは２つの駆落ち事件（２つとも明らかに女性の罪）で一旦停止状態になってしまう。それは父権制社会の財産の掟も対話の掟も押しつぶしてしまう。その上駆落ちの他にその不義を論ずる際のメアリーの冷静で不逞な話し方というおまけが加わる。社会制裁の既成の流儀からはみ出した女の欲望の軽薄さを主張するという形で，この二つの不道徳な行ないはマンスフィールドの父親の権威と掟をくつがえしてしまう。

マンスフィールド・パークでは，女性たちが不賛成でもそれが推定されるだけ（実行に移されない）である限りは，事はおだやかに運んでいく。バートラム令夫人は自分としては何も文句がない。娘たちは自分たちの勝手気ままを決して言い表わさない。彼女たちの反逆が，ファニーに知れても，ファニー自身は自分の知っていることを表明しないし，たとえ人に話しても耳を傾けてもらえない。保護者たちに対するメアリー・クローフォードの下品に騒々しい無礼さもなかなか弁明が許されない。しかし女性たちの反抗が無視出来なくなれば男性たちは徹底的に邪魔をする。

サー・トーマスはふだんおとなしいファニーの思いがけない，しかもかなり奇妙な反抗に会って，ファニーに対する支配力も自分自身の理解力も中断したかの感じである。

'There is something in this which my comprehension does not reach.'

(M.P.315)

マライアがさらにいっそう手におえない罪をおかした時，サー・トーマスはまったく無力状態寸前である。エドマンドは手紙でファニーに

'My father is not overpowered. More cannot be hoped. He is still able to think and act.' (M.P.442)

と知らせている。いっぽうノリス夫人は一番お気に入りの姪の駆落ちの知らせに，すっかり人が変ったようになり，静かになり，ポカンとしてまわりのことにはいっさい無関心になる。(M.P.448)

このマライアの駆落ちについてのメアリークローフォードの言葉は，あけすけでしゃあしゃあとしていて慎しみから来る嫌悪の念など全くない。エドマンドは失望する。メアリーが非難しているのは，不義を勘づかれたことで，非行そのものではないのである。(潔癖なエドマンドは，その話をするのに辺りを憚り，用語も選んでいるにもかかわらず。) もっと後のことになるがエドマンドのメアリーへの恋心に終止符を打つのは，ヘンリーとマライアとの駆落ちの後始末としてメアリーが提案した事（つまり２人をきちんと結婚させようというのである。) から，エドマンドが，節操の足りないメアリーは心がねじくれていると感じることである。間違っていても頬かぶりをして押し通してしまえばよいと考えていることと，罪悪をそのまま続けることを承服し，妥協し，黙認すれば結婚の可能性もないわけではないと励ましていることに，エドマンドは自分がそれまで１度もメアリーを理解していなかったのだと思う。この考え方の根本的な相違が２人の間の埋めることの出来ない溝なのである。

バートラム家の人々はマライアの非行を良家の父親に対する罪と見なしている。サー・

トーマスの意見では，マライアの行動には，どんな言い訳をしても近所の人々に対して失礼な振舞を必然的に伴うことになるだろう。（現代の人々の考えとは何と異っていることであろう。）そしてまた他人の家庭に自分が経験したみじめな思いを持ち込む手伝いは少しでもしたくないというのである。バートラム家の人々の観点からみると，この小説は伝統的な小説から派生した復古主義的定則である「復讐」で幕を閉じることになる。悪魔のような（意地の悪い）ノリス夫人は善良な男（サー・トーマス）の信頼を裏切った者として別の州に住むことになり，マライアも当然の報いとして，ノリス夫人と二人だけでほとんど交際もなく暮すことになる。メアリー・クローフォードも姉とともにロンドン住いにもどる。ヘンリー・クローフォードは少なからぬ心痛と後悔を味わう。トムは健康をとりもどし，考え深くなり，父親の役に立つようになる。慎ましい居候娘ファニーは受身ながら勝利感を味わい，望んでいたことすべてがかなうことになる。サー・トーマスは自分の野望（ファニーをヘンリーと結婚させること）を後悔し，エドマンドとファニーの結婚を祝福し，隣の牧師館に住まわせる。

この小説のはじめからノリス夫人は特別多すぎる非難をこめた悪口で有名である。彼女の品位は嫌味で下げられっ放しである。それなのに比較的目立たないのは，彼女のこういう罪が正当化されている，つまり時にはサー・トーマスによって要求されていることさえあるからである。彼はファニーを犠牲にしても自分の娘の，より高い地位，権利，そして将来の好望を維持させるために協力してほしいとノリス夫人に頼む，彼はマライアの良家の息子との結婚を認める。そうなるとノリス夫人は彼女なりの悪役というよりはサー・トーマスの副官といったところである。読者はノリス夫人の中にサー・トーマスの差出がましさ，気前の良さ，家の誇り，さらにけちんぼ振りさえ見出す。結局バートラム家の財政に対するサー・トーマスの心配がノリス夫人にファニーを引取ってもらいたいなどと言い出させるわけである。「ファニーにはちょっと秘密好きで，気ままで素っとんきょうなところがある。」とノリス夫人はこき下すのだが，サー・トーマスは（ナレーターが指摘しているように）つい先刻，自分でも同じ意見を述べていたことに気が付かない。終には自分がノリス夫人と類似したところがあることを認めるのだが，彼女がマンスフィールドから去るとサー・トーマスは気楽になる。そして道徳的威厳にどこか似たものがサー・トーマスに復活する。これはノリス夫人のおかげだと筆者は考える。この様な筋はオーステンの円熟期の作品には見当らない。

Mansfield Park において不穏な皮肉といえるものは，サー・トーマスが具現している保守的な観念形態が，人もあろうにファニーに重くのしかかって来ることである。（ファニーこそ保守的な思考様式を信じ，終までそれに法って行動するただ１人の登場人物であるにもかかわらずである。）ポーツマスのむさ苦しい家に里帰りしたファニーは，やがてマンスフィールドが恋しくなる。

> …all proceeded in a regular course of cheerful orderliness ; everybody had their due importance ; everybody's feelings were consulted. (M.P.392)

しかしファニーの里帰りは（サー・トーマスが目論んだように）彼女にマンスフィールドが与えてくれる富と快適さの価値を教えてくれる。しかし，ファニーが遠くから焦れている荘麗な家屋敷は実は（読者も知るように）今にも破産しそうなのである。cheerful であったこともないし，orderly でもなかったし，すべての人の気持に考慮が払われてなどいなかったのである。ことにファニーの気持など

考慮されたためしもなかった。苦笑を禁じ得ないがホーム・シックのファニーにはそう思われたのであろう。このマンスフィールドにファニーは皆に望まれて帰って来るのである。ファニーを安座させる伝統通りのハッピー・エンディングがやはり一番落着くようである。

ジェイン・オーステンの小説が扱っているのは限定された広さの社会の人間の相関関係である。マンスフィールドという狭い限られた広さの中に何人かの人間が同時に共存する時，そこには相互の欲望，利害，感情の衝突が生じる。社会的身分の相違からの偏見や反感も生まれて来る。こういうものを題材にして取扱う限り，その葛藤の中に立たされたヒーロー（或いはヒロイン）の生き方の問題，道徳的原理の追求が根本とならざるをえない。その意味で，ジェイン・オーステンはイギリス小説の道徳性という偉大な伝統の重鎮をなす作家である。

BIBLIOGRAPHY

The Oxford Illustrated Jane Austen Mansfield Park edited by R. W. Chapman
(London, Oxford U.P. 1987)
(M.P.) 引用はすべてこの版による。

Jane Austen's Letters collected and edited by R. W. Chapman 2nd ed.
(Oxford U.P. 1979)

Mary Evans : *Jane Austen and the State*
(Tavistock Publications, London. 1987)

Samuel Pickering Jr. : *The Moral Tradition in English Fiction 1785-1850*
(Hanover, N.H : U.P. of New England, 1976)

Tony Tanner : *"Introduction" to Mansfield Park*
(Harmondsworth, Penguin, 1966)

The Jane Austen Companion, ed.
(J. David Grey, A. Walton Litz and Brian Southam, New York, Macmillan, 1986)

Marilyn Butler ; *Jane Austen and the War of Ideas*
(Oxford : Clarendon Press, 1975)

Claudial L. Johnson : *Jane Austen Women, Politics, and the Novel.*
(The University of Chicago Press, 1988)

G. B. Stern : *Mansfield Park*
(London and Glasgow, Richard Clay The Chaucer Press : Suffolk, 1980)

D. D. Devlin : *Jane Austen and Education*
(London, Macmillan Press, 1975)

David Monaghan : *Jane Austen Structure and Social Vision*
(London, Macmillan Press, 1980)

Bernard J. Paris : *Character and Conflict in Jane Austen's Novels*
(Wayne State U.P : Detroit, Michigan, 1978)